

和文露訳の問題点(1)

— 主題を表す「は」を伴う構文の翻訳法についての試論 —*

高橋 健一郎

はじめに

- (1) * Я украли деньги.
- (2) * Я болел голова.

この2つの例文は和文露訳の授業の中でそれぞれ「私はお金を盗まれた」と「私は頭が痛かった」の「答え」として実際に学生が書いたロシア語文である(文頭の*は「非文」を表す)。正しい答えは例えばそれぞれ У меня украли деньги や У меня болела голова などであり、これはロシア語としてはけっして難しいものではない。この誤答を書いた学生はロシア語の能力の比較的高い学習者であり、例えば(1)に関して、日本語の「受身」が不定人称文によって表されるという点は部分的に理解できているようである(украли と複数の形にしている)。(2)も使っている単語は正しい。これら一見簡単に見える日本語文がこのように誤ってロシア語訳される背景には、日本語の「～は」の理解の仕方がある。初歩のロシア語学習者は、どちらの文も日本語では「私」があくまで〈主体〉であると感じ、それを自動的に主格で表現したくなくなってしまうようである。

日本語の「～は」が〈主語〉を表さないということは、三上章の「主語廃止論」¹をはじめとして日本語学では盛んに論じられるようになって久しい。し

* 本研究は平成19年度札幌大学研究助成制度による研究成果の一部である。

¹ 三上章『象は鼻が長い——日本文法入門』くろしお出版、1960年を参照のこと。

かし、一般の外国語学習者にとって日本語の「は」の呪縛は想像以上に強く、上記のような誤りは初心者だけに限られるものではないだろう。ロシア語を話すときにまず日本語を思い浮かべ、日本語文の冒頭にくる「～は」の部分をロシア語で主格で表現してみたはいいものの、その先が続かなくなり立ち往生するという経験は、ロシア語学習者の多くが経験していることではないだろうか。

本稿では、「～は」=〈主語〉と思い込んでいる学習者の、その思い込みを打破するために、日本語の主題を表す「～は」の構文をいくつかのタイプに整理したうえで、それぞれがどのようにロシア語に訳され得るかを検討する。もちろん、日本語とロシア語は系統的に非常に異なる言語であり、同じ構文であっても語彙によってまったく異なる形で訳されることも多く、構文レベルで一般化できるような翻訳法というもの存在しない。しかし、多くの学習者に共通する上記のような「～は」構文の誤訳を防ぐためには、日本語の「～は」構文の論理をロシア語の論理に合うような形に直す作業を行い、論理的に整理することが役に立つだろう。以下、これまでの日本語学における知見を参照しながら、「～は」構文の種類を分類し、それぞれどのように捉えてロシア語に翻訳すべきかを考えてみたい。同様の問題は磯谷孝氏の『ロシア語作文教程』（三省堂、1973年）の中でも「主語を表わさない《～は》」や「～は～が～だ」などの項ですでに扱われているが、惜しむらくは日本語の主題表現のさまざまなタイプが混在しており、それらの構文の仕組みの説明がほとんどないままロシア語訳例が並んでいるだけである。本稿ではその後の日本語学で明らかにされてきたことを参照しながら、網羅的とはいかないまでも、「は」の呪縛から逃れるための考え方を得る道筋を提示したい。

1. 問題の所在：〈主語〉と〈主題〉

太郎は来なかったよ。

太郎は見かけなかったよ。

という2つの文における「太郎」は、前者が「文法的」には〈主語〉であり、後者が〈目的語〉(ロシア語では〈対格補語〉)となるが、日本語母語話者の心理から言うと、どちらも同じようなものであるため、伝統文法においては、両者とも〈心理的な主語〉とされ、〈文法上の主語〉と〈心理的な主語〉という区別をもうけることがあった。

この〈心理的な主語〉は現代言語学では〈話題〉や〈主題〉などと呼ばれるのがふつうである(本稿では以下〈主題〉を使う)。一般に〈主題〉に相当する部分は文の冒頭に置かれる傾向があるため、文の冒頭には〈心理的な主語〉が来やすい。そして、語順の自由度が高い言語では、文法上の主語以外の要素が文頭に来ることも可能な場合が多い。つまり、文法上は主語でなくても文頭に置くことに抵抗はなく、その結果〈文法上の主語〉と〈心理的な主語〉の一致度は高くない。それに対して、英語のように語順の自由度が低い言語では、文頭に来るのは多くの場合〈文法上の主語〉であり、〈文法上の主語〉と〈心理的な主語〉が一致することが多い²。

ここで扱うロシア語も日本語とほぼ同程度に語順の自由度が高い言語であるが、問題は〈心理的な主語〉ないし〈主題〉が日本語では語順だけではなくもっぱら「は」という不変化詞(助詞)で表されるのに対し、ロシア語ではそれが語順(とイントネーション)のみで表され、文法上の格表示(対格、与格など)をそのまま保ったうえで文頭に置かれるということである。例えば、上記の2つの例文「太郎は来なかったよ」と「太郎は見かけなかったよ」で、日本語ではどちらも文頭の「太郎」に同一の助詞「は」が伴うのに対し、ロシア語では、前者は〈主格〉、後者は〈対格〉のように、形態論的カテゴリーである〈格〉が異なる。よって、日本文からロシア文へと転換する際には、同一の「は」によって示されている〈主題〉を、いったん文法的な格関係の中で捉えなおし、それをロシア語に当てはめて考える必要があるということである。以下において、その作業を主にロシア語学習者への教育という観点から行うが、

² 池上嘉彦「『日本語論』への招待」講談社、2000年、246-247頁を参照。

その前に日本語とロシア語の〈主題〉に関して簡単に整理しておこう。

一般に主題をもつ文では、主題を表すためのなんらかの言語的手段が用いられる。その手段は言語によってさまざまだが、大きく分けると、「形態的手段」（日本語の「は」のようなもの）、「文法的手段」（主題を文頭の方へおくという語順の変更）、「音声的手段」（主題の後の休止やイントネーション）の3つがある³。

日本語の文の〈主題〉は上の3つの手段すべてが使われるが、最も重要なのは「形態的手段」であり、それは基本的には助詞「は」でマークされる。もっとも、日本語では話し言葉の場合、主題を表す「は」が落ちることが多く、その場合「文法的手段」や「音声的手段」の役割が大きくなるが、本稿では主としてニュートラルな書き言葉を対象とするため、日本語の主題は基本的に「は」によって表わされるということを前提としておく。また、「は」は主題を表す性格が弱まり、主として「対比」を表す場合もあるが（例えば「私はカレーは作った」）、本稿ではそれは対象外である。

ロシア語の文の〈主題〉は主として文の現実的区分理論（Теория актуального членения предложения）の分野で研究される。「文の現実的区分」とは「コンテキストにおいて文をメッセージの出発点（テーマ：тема）と、テーマについて述べられるもの（レーマ：рема）に区分すること」⁴である。この〈テーマ〉と日本語学でいうところの〈主題〉が同一視されるものかどうかは検討の余地があるものの、しかし本稿ではほぼ同等のものとみなしたうえで、ロシア語学の用語である〈テーマ〉も以降〈主題〉として扱う。

ロシア語の主題は一般に文の先頭の位置に置かれ、話し言葉においては通常上昇イントネーションによって表わされる。感情的な発話などにおいては「倒置」の影響を受けて、必ずしも主題が文頭にこなかったり、また上昇イント

³ 野田尚史「主題の対照に必要な視点」／益岡隆志編『主題の対照』くろしお出版、2004年、194頁。

⁴ Большой энциклопедический словарь: Языкознание. Глав. редактор, В.Н. Ярцева. М.: «Большая Российская энциклопедия», 1998, с. 22.

ネーションによって特徴づけられない場合も多い。本稿では、書き言葉のニュートラルな発話を対象とし、イントネーションは考察の対象外とし、〈主題〉は基本的には文頭に置かれるということを前提とする⁵。

2. 主題を表す「は」が使われる文の種類

これまでの日本語研究の中で、主語と主題に関して出発点となる大きな業績を残したのは三上章であろう。その後、三上の「主語廃止論」をめぐる賛否両論さまざまな議論が繰り広げられているが⁶、ここではその議論に加わるのではなく、日露翻訳における実用的な観点から三上の「～は」の研究が有効なものと考え、それを出発点としたい。

主題について三上が主張していることを簡単にまとめると次のようになる：

「は」には本務と兼務の二つの働きがある。本務は、主題を表し文末の述語と呼応することである。兼務は、格関係を表すことである。⁷

例えば、「象は鼻が長い」から、本務として主題を表す「は」を消して「無題化」すると、「象の鼻が長い(こと)」のような格関係が現れる。こうして現れた「象の」が、「象は」の兼務だというのである。反対にこの「象の」を主題にすれば、「象は鼻が長い」のようになる。

「象は鼻が長い」(「象の」を主題化したもの)

⁵ ロシア語の「主題」のイントネーションに関しては、青木則子「ロシア語のテーマ——テーマ・レマ区分の観点から——」/益岡隆志編『主題の対照』くろしお出版、2004年、149-169頁を参照のこと。

⁶ 「三上文法」をめぐる賛否両論の議論を踏まえつつ、現代的観点から「三上文法」を整理したものに、庵功雄『《象は鼻が長い》入門——日本語学の父 三上章』くろしお出版、2003年がある。

⁷ 三上章、前掲書を参照。

「象の鼻が長い（こと）」（無題化した命題レベル）⁸

同じように、次の例もそれぞれ上の文が「は」によって主題化されたもの、下が無題化された命題レベルである。

父はこの本を買ってくれた。

父がこの本を買ってくれた（こと）（無題化した命題レベル）

日本は地震が多い。

日本に地震が多い（こと）（無題化した命題レベル）

このような格関係をもとに、さらに整理すると、「は」が使われる文は、文の中のどんな成分が主題になっているかという点から、次の6つに分類できる⁹。

- 1) 格成分が主題になっている文：「父はこの本を買ってくれた」構文
- 2) 格成分の連体修飾部が主題になっている文：「象は鼻が長い」構文
- 3) 述語名詞の連体修飾部が主題になっている文：「かき料理は広島が本場だ」構文
- 4) 被修飾名詞が主題になっている文：「辞書は新しいのがいい」構文
- 5) 節が主題になっている文：「花が咲くのは7月ごろだ」構文

⁸ 「象は鼻が長い」の基底構造を「象の鼻が長い」とすることに対しては少なからず批判もある。例えば、西山佑司は「象は鼻が長い」を「措定文」ととし（「象は」が主題、「鼻が長い」を「属性」とみなす）、それを「象の鼻が長い（こと）」から主題化によって派生させるのは間違いだとする（西山佑司「「象は鼻が長い」構文について」／『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』21、107-133頁）。しかし、この例文に代表される「XはYがZだ」の構文における「XはY」に関しては「XのY」の関係にあるとみなせるものが非常に多く、ロシア語訳の際には、「XのY」と考えなければ訳が難しい場合もあり、本稿では三上の説に依拠する。

⁹ 野田尚史「「は」と「が」」くろしお出版、1996年、17頁参照。

6) 破格の主題をもつ文：「このにおいはガスが漏れてるよ」構文

この6つのタイプそれぞれについて、以下で考察する。

3. 格成分が主題になっている文

6つのタイプのうちで最もよく使われるのは、格成分が主題になる文である。格成分とは、動詞や形容詞などの述語に対して、その動作を行う動作主や対象、相手、手段など、あるいは性質や感情の持ち主などを表すものであり、「が」「を」「に」「で」「へ」などの形をした成分である¹⁰。どの格成分も主題になれば「は」がつくが、「～が」と「～を」に関しては、うしろに「は」がつくと、格助詞の「が」と「を」は消え、「～に」、「～で」、「～へ」も格助詞が消えることがある。下の表を参照されたい。

格成分に「は」がつくときの形

ここが	+は	→	ここは
ここを	+は	→	ここは
ここに	+は	→	ここには (ここは)
ここで	+は	→	ここでは (ここは)
ここへ	+は	→	ここへは (ここは)
このこと	+は	→	このことは
ここから	+は	→	ここからは
ここまで	+は	→	ここまでは

このうち、もともとの格助詞が消えるタイプが本稿では重要であり、以下、それらについてとりあげる。

¹⁰ 同書、18頁。

3.1 「～が」が主題になっている文

動作やできごとの主体を表す「が」は格成分の中でも最も文の主題になりやすいものである。このタイプは例えば次のような文である。

【父はこの本を買った】

父がこの本を買った（こと）（無題化した命題レベル）

⇒ Отец купил эту книгу.

これは多くの場合、ロシア語訳で問題になるタイプではない¹¹。

3.2 「～を」が主題になっている文

このタイプは、たとえば次のような文である。

【この本は父が買ってくれた】

この本を父が買ってくれた（こと）（無題化した命題レベル）

ロシア語訳はたとえば次のようになる。

Эту книгу купил отец.

すでに述べたように、ロシア語では〈主題〉は基本的には語順で示され、文頭に置かれることによって示される。したがって、「この本」が主題化すると、ロシア語でもその部分が文頭に置かれ、この эту книгу が〈主題〉(тема)と

¹¹ もっとも、日本語の「が」格がロシア語で主格で表されない例は多数ある。例えば、「私は20歳である」を無題化すると「私が20歳である（こと）」となるが、この「私が」の部分はロシア語では〈主格〉ではなく、通常〈与格〉で表される。しかし、この種の問題は、そもそも日本語の格がロシア語の格と一致しない場合があるという普遍的な問題であり、「主題化」によって生じる問題ではないため、本稿では考察の対象外とする。

なる。しかし気をつけるべきは、ロシア語では文法的な格がそのまま保たれるため、「この本」の部分は〈対格〉であり、文の成分は〈補語〉であるということである。〈主題〉と〈主語〉、あるいは〈心理的主語〉と〈文法上の主語〉の区別が曖昧な初心者は特にこのタイプに注意が必要であり、「この本は」という文頭の主題をロシア語で〈対格〉で表すことに対する抵抗感を取り除く必要がある。

ほかに、このタイプの文には、たとえば三上章などが「料理型」と呼ぶもののように、動作の主体が現れないものもある。

【ゆでた人参は輪切りにする】

ゆでた人参を輪切りにする (コト) (無題化した命題レベル)

⇒ **Вареную морковь** «нарезать [нарезают] кружочками.

「を」は動作の対象を表すというよりは、例えば次のように場所を示しているだけの場合もあり、それが主題化することもある。

【この道は歩きにくい】

この道を歩きにくい (こと) (無題化した命題レベル)¹²

⇒ **По этой дороге** трудно идти.

3.3 「～に」が主題になっている文

「～に」には、「私に妻がいる」などのいわゆる「与格主語」のほか、場所を表すものや、相手を表すもの、「～になる」のような結果の状態を表すものなどいろいろな種類があるが、そのうち主題になりやすいのは、与格主語と場所を表すものであり、だいたい次のような4つのタイプが典型的である。

¹²「歩きにくい」を一つの形容詞のように考えて、「この道が歩きにくい (こと)」のように無題化することもでき、その場合例えば Эта дорога трудна для хождения というロシア語も可能である。

①「～は…がある／いる」(所有・存在)

【彼は変わった趣味がある】

彼に変わった趣味がある (こと) (無題化した命題レベル)

⇒У него странное хобби.

【彼は妻がいる】

彼に妻がいる (こと) (無題化した命題レベル)

⇒У него есть жена.

【このカバンは何も入っていない】

このカバンに何も入っていない (こと) (無題化した命題レベル)

⇒В этой сумке ничего нет.

【日本は温泉が多い】

日本に温泉が多いこと

⇒В Японии много горячих источников.

なお、「～は…が多い」はたとえば、「Япония богата горячими источниками」のように訳すことも可能である。「日本には温泉が多い」という文では、「日本」がまずは〈場所〉として捉えられ、その場所における事態が叙述されるのに対し、「日本は温泉が多い」という文では、あくまでも「日本」が主題化され、「日本」のもっている性質について叙述される。そう考えると、厳密には後者に対応するロシア語としては「Япония богата горячими источниками」のほうが近いとすることも可能であろう。しかし、「日本は…が多い」を「日本に…が多いこと」と無題化する操作の方が汎用性が高く、学習者はまずはこちらの方に習熟したいものである。

②「～は…行く」(目的地)

【モスクワは行ったことがない】

モスクワに行ったことがない (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ В Москву я никогда не ездил.

③「～は…が分かる」(理解)

【彼は他人の苦しみ分かる】

彼に他人の苦しみ分かる (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Ему понятны чужие страдания. / Он понимает чужие страдания.

④「～は…が必要である」(必要)

【彼は休息が必要である】

彼に休息が必要である (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Ему нужен отдых.

3.4 「～で」が主題化されている文

主として〈場所〉を表す「～で」が主題化されることがある。

【日本は地震がよく起こる】

日本で地震がよく起こる (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ В Японии часто бывают землетрясения.

抽象的な〈場所〉に関しても同様である。

【この点は君と同意見だ】

この点で君と同意見である (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ В этом отношении я с тобой согласен.

つまり、これらのタイプに関しては、すべて無題化して格関係を正確に捉えた上でロシア語訳を考えることが重要で、主題は基本的にはその部分を文頭に置くことによって表される。

4. 格成分の連体修飾部が主題になっている文

これは「象は鼻が長い」という有名な例文で代表されるタイプであり、初歩の学習者の誤りが特に多い構文である。三上章はこの文は「象の鼻が長い（こと）」という格関係の中の「象の」が主題になった文であるという提案を行った。それに基づき、基本的にはこのタイプは「～の」と無題化し、そのままロシア語に訳すことも可能であり、たとえば上記の文はとりあえず以下のように訳すことができる。

Хобот слона длинный.

しかし厳密に言えば、このロシア語文は「象の鼻が長い（こと）」という無題化命題のうち「象の鼻」の部分为主题化したものであり、「象の鼻は長い」という日本語文に相当する文である。それに対して、「象は鼻が長い」という文では、「象」が特に取り立てられており、「象」に関して叙述したものとなっている。

象の鼻が長い（こと）

↓

象が鼻が長い（こと）

↓

象は鼻が長い

このことを考慮に入れれば、ロシア語ではたとえば «у кого какое что» とい

う構文が使える、次の訳の方が適切だろう。

У слона длинный хобот.

しかし、この構文(「XはYがZだ」)で現れる「XのY」という形は多種多様であり、いつでもこういう操作が可能となるわけではない。以下、この構文で用いられる「XのY」におけるXとYの関係のタイプを整理し、翻訳例を挙げよう。XとYは意味的な関係が密接であり、Yはいろいろなタイプの名詞が入り得るが、それを便宜的に「側面を表す語」、「部分を表す語」、「所有物を表す語」、「相対関係を表す語」、「動作を表す語」、「生成物を表す語」に分け¹³、それぞれの代表的な名詞が使われた例文を、上の「象は鼻が長い」と同じように、まず「XのY」の形で無題化してロシア語訳を考え、次にXを取り立てた形の表現がロシア語で可能な場合には、それを記述する。

①側面を表す語

一つの事物をいろいろな観点から眺めることによって、異なった属性を抽出することができるが、その観点を表すのが「側面を表す語」であり、例えば「体重」、「性質」、「体格」、「機能」、「職業」、「色」、「サイズ」、「価格」、「温度」、「流れ」、「材料」などが例として挙げられる。

¹³ この分類はあくまでも便宜的なものであり、特に「側面を表す語」、「部分を表す語」、「所有を表す語」は実際には連続したものである。例えば、この分類では「彼の髪」の「髪」は「部分を表す語」であり、「彼のかつら」の「かつら」は「所有物を表す語」となるが、そこに本質的な差はないと見なすことも可能であろう。本稿ではこの分類に特別な意味をおいているわけではなく、ロシア語訳を考える際に整理しやすくするためのものである。なお、この構文におけるXとYの名詞のより本質的な関係については、天野みどり「二つの補充分間の意味的關係づけ——経験的間接関与構文、特に複主格文を中心として——」／『新潟大学人文科学研究』80、1992年、33-58頁を参照のこと。ただし、本稿では必ずしも天野の分類の仕方には従っていない。

【私は体重が 50 キロです】

私の体重が 50 キロである (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Мой вес — 50 килограмм.

「私」を取り立てて表現する場合

⇒ **У меня** вес — 50 килограмм.

【羊は性質がおとなしい】

羊の性質がおとなしい (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Характер овцы спокойный.

「羊」を取り立てて表現する場合

⇒ **У овцы** спокойный характер.

【彼は体格が良い】

彼の体格が良い (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Его телосложение крепкое.

「彼」を取り立てて表現する場合

⇒ **У него** крепкое телосложение.

【この機械は機能が複雑である】

この機械の機能が複雑である (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Функции этой машины сложные.

「この機械」を取り立てて表現する場合

⇒ **У этой машины** сложные функции.

【彼は職業が安定している】

彼の職業が安定している (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Его профессия стабильная.

「彼」を取り立てて表現する場合

⇒У него стабильная профессия.

【この紙は色が悪い】

この紙の色が悪い (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Цвет этой бумаги плохой.

「この紙」を取り立てて表現する場合

⇒У этой бумаги плохой цвет.

【この靴はサイズが小さい】

この靴のサイズが小さい (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Размер этой обуви маленький.

「この靴」を取り立てて表現する場合

⇒У этой обуви маленький размер.

【この家は価格が高い】

この家の価格が高い (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Цена этого дома высокая.

「この家」を取り立てて表現する場合

⇒У этого дома высокая цена.

【アイスクリームは温度が低い】

アイスクリームの温度が低い (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Температура мороженого низкая.

「アイスクリーム」を取り立てて表現する場合

⇒У мороженого низкая температура.

【この川は流れが速い】

この川の流れが速い (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Течение этой реки быстрое.

「この川」を取り立てて表現する場合

⇒У этой реки быстрое течение. / В этой реке быстрое течение.

【この料理は材料が簡単である】

この料理の材料が簡単である（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Продукты для этого блюда простые.

「この料理」を取り立てて表現する場合、他の多くの語のように前置詞 *y* によって表すことは難しい。例えば、

⇒Для этого блюда продукты простые. / Это блюдо готовится из простых продуктов. などとするのがよいだろう。

このように、多くの「側面語」の場合は、前置詞 *y* を用いて *X* を主題化して表現できることが多い。しかし、「材料」のように、「側面語」とはいても *Y* が *X* の抽象的な特徴ではなく、*X* とはっきり区別される物体であるような場合、前置詞 *y* によって *X* を主題化することが困難な場合もあり¹⁴、その場合、個別の語に応じて、訳を考えなければならない。

②部分を表す語

これには「身体部位」、「部品、構成部分、構成員」などがある。代表的な「象は鼻が長い」の「鼻」もこの「身体部位」である。

【彼女は髪が長い】

彼女の髪が長い（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Её волосы длинные.

¹⁴ 本稿では詳しく踏み込まないが、前置詞 *y* を用いた構文の容認可能性は *X* や *Y* の名詞、あるいは *Z* のタイプによって変わってくる。

彼女が髪が長いこと

⇒У неё длинные волосы.

【この野菜は葉を食べる】

この野菜の葉を食べる (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Едят листья этого овощного растения.

「この野菜」を取り立てて表現する場合

⇒У этого овощного растения едят листья.

このように、Xが「生物」、Yがその「(身体)部分」であるとき、ほとんどの場合、上の最終訳文のような形が一番近い。それに対して、Xが「場所」や「組織」の場合、「XのY」で無題化したものを訳したもので基本的には十分であり、Xのみを取り立てて主題化する必要は必ずしもない。主題化する場合は、例えば「Xで」と無題化して考えるのが適切である場合が多い。

【この部屋は天井が高い】

この部屋の天井が高い (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Потолок этой комнаты высокий.

この部屋で天井が高い (こと) (無題化した命題レベル)

⇒В этой комнате высокий потолок.

【このデパートは店員が親切だ】

このデパートの店員が親切である (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Продавцы этого универмага доброжелательные.

このデパートで店員が親切である (こと) (無題化した命題レベル)

⇒В этом универмаге продавцы доброжелательны.

③所有物を表す語

これはXが「所有者」、Yが「所有物」である場合である。これも基本は「XのY」と無題化すればよい。特にXを取り立てる場合は、前置詞yによって表される場合が多いだろう。

【彼は家が倒壊した】

彼の家が倒壊した（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Его дом разрушился.

「彼」を取り立てて表現する場合

⇒У него дом разрушился.

【彼はスーツケースが無くなりました】

彼のスーツケースが無くなった（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Его чемодан пропал.

「彼」を取り立てて表現する場合

⇒У него пропал чемодан.

④相対関係を表す語

これは特定の対象を指示するのに基準との相対関係によって指示する場合のものである。例えば、Xが「基準となる場所・時・人物」、Yが「その基準との相対関係で決まる場所・時・人物」であるような場合であり、例を挙げると、Xが「吉田さんの家」でYが「隣」、Xが「祭り」でYが「前日」、Xが「彼」でYが「妻」などである¹⁵。

【吉田さんの家は隣が学校だ】

吉田さんの家の隣が学校である（こと）（無題化した命題レベル）

¹⁵ この点については、天野みどり、前掲論文、40-44頁を参照のこと。

⇒Рядом с домом Йосида находится школа.

Xが基準となる場所で、Yがその基準との相対関係で決まる場所を表すのは、ほかに「前」、「後ろ」、「東」、「西」、「南」、「北」、「上」、「右」などさまざまあるが、これらはロシア語では基本的には名詞そのものでは表されず、それぞれ「前に」、「後ろに」、「東に」・・・などと表現され、それゆえにロシア語でXの名詞だけを主題化するのは困難な場合が多い。これらの場合、例えば「Xは隣がYだ」⇒「XはYの隣にある」、「Xは前がYだ」⇒「XはYの後ろにある」などと変換することによって表される場合もあるだろう。

⇒Дом Йосида находится рядом со школой.

【祭りは前日が楽しい】

祭りの前日が楽しい (こと) (無題化した命題レベル)

⇒День перед праздником весело проходит. / В день перед праздником весело проходит время.

Xが基準となる時で、Yがその基準との相対関係で決まる時を表すのは、ほかに「翌日」「あくる日」「翌年」「前の」…などがあるが、これらはロシア語では多くの場合名詞表現そのままでは表わされず、副詞句となる場合が多いため、それゆえにロシア語でXのみを主題化することは難しい。なお、この例文に関しては、上記の訳は直訳調であり、実際には«Ожидание праздника лучше самого праздника»などとするほうが自然である。

【彼は妻が亡くなった】

彼の妻がなくなった (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Его жена скончалась.

「彼」を取り立てて表現する場合

⇒У него жена скончалась.

「場所」や「時」、「人物」以外にも、例えば「この選挙はいろいろな評価が

ある」の「評価」などのように、基準となる「この選挙」があつてはじめて指示対象が確定するようなものもある。

【この選挙はいろいろな評価がある】

この選挙のいろいろな評価がある

⇒Есть разные оценки этих выборов.

「この選挙」を取り立てて表現する場合、「この選挙に関しては」とするか、あるいは「評価がある」を「評価されている」のように動詞表現にすることも可能であろう。

⇒По поводу этих выборов есть разные оценки. / Эти выборы оцениваются по-разному.

⑤動作を表す語

これはXが動作の対象を表し、Yが動作を表す。このタイプもまずは「XのY」と無題化して考えることが出発点となるが、しかしYが動作を表す語であることから、それを動詞で表し「XをYする」と捉えることも可能である。述語は動作を修飾するタイプが多いため、これは例えば上で見た「この道は歩みにくい」などと同じタイプとなる。

【この機械は操作が難しい】

この機械の操作が難しい（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Управление этой машиной трудно.

Yの動作を動詞で表し、「この機械を操作するのが難しい（こと）」と考える

⇒Трудно управлять этой машиной.

さらに、「この機械」を取り立てて表現すると

⇒Этой машиной трудно управлять.

さらに、「この機械が操作が難しいこと」と無題化し、「この機械がく操作の

点で「難しい」という意味に解釈すれば

⇒**Эта машина** трудна в управлении.

という訳も可能である。

【この野菜は栽培が簡単だ】

この野菜の栽培が簡単である (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Выращивание этого овощного растения легко.

Yの動作を動詞で表し、「この野菜を栽培するのが簡単である (こと)」と考え

⇒Легко выращивать это овощное растение.

さらに、「この野菜」を取り立てて表現すると

⇒**Это овощное растение** легко выращивать.

また、「この野菜が栽培が簡単であること」と無題化し、「この野菜が〈栽培の点で〉簡単である」という意味に解釈すれば

⇒**Это овощное растение** легко в выращивании.

という訳も可能である。

⑥生成物を表す語

Xが「材料」や「手段」をあらわし、YがXからできるものである。

【リンゴはジュースがいい】

リンゴのジュースがいい (こと) (無題化した命題レベル)

⇒Яблочный сок лучше. / Я предпочитаю яблочный сок.

しかし、このように無題化してしまうと、「(例えばオレンジジュースではなく) リンゴのジュースがいい」と解釈されるのが普通であり、原文が意味するような「(例えば生よりも) ジュースがいい」という解釈にはなりにくい。「リンゴ」を取り立てる場合、例えば「リンゴからはジュースを作るのがよい」などと考え、次のように訳すことが可能である。

⇒Из яблока лучше всего делать сок.

5. 述語名詞の連体修飾部が主題になっている文：「かき料理は広島が本場だ」構文

「かき料理は広島が本場だ」（「XはYがZだ」）のタイプの構文は「広島がかき料理の本場であること」（「YがXのZだ」）という格関係がもとになっていると考えられる。

Хиросима славится блюдами с устрицами.

「かき料理」を取り立てて表現すると、例えば次のようになるだろう。

Блюдами с устрицами славится Хиросима.

この構文では述語は必ず「本場だ」のように名詞述語になる。しかし、この場合述語である「本場だ」は例えば上記のように *славиться* という動詞でも表し得るため、ロシア語訳は比較的問題がないが、他の名詞が述語をなす場合、必ずしもこのような形では訳せない場合が多い。例えば、「本場」を *самое знаменитое место* のように名詞句で訳した場合、ロシア語訳では「かき料理」のみを主題化することは難しい。その場合、「かき料理の本場が広島であること」（XのZがYである）の形に基づいて訳した次のような訳文が、構文レベルでは最も汎用性が高いだろう。

Самым знаменитым местом блюд с устрицами является Хиросима.

ほかにいくつか他の名詞を取り上げ、その翻訳を考えてみよう。野田によれば、「本場」の部分に入る名詞は種類が限られており、だいたい次の6種類に分けられる¹⁶。それぞれについて考えてみよう。

①「特徴」類（「特徴」、「特色」、「とりえ」、「欠点」、「特技」、「自慢」など人やものの特徴を表す名詞）

【日本人は勤勉が特徴である】

勤勉が日本人の特徴である（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Трудолюбием является характер японцев.

「XのZがYである」の形（「日本人の特徴が勤勉であること」）

⇒Характер японцев является трудолюбием.

「日本人」を取り立てて表現する場合、「特徴である」を例えば「特徴的である」という意の形容詞で表現すると

⇒Для японцев характерно трудолюбие.

②「中心」類（「中心」、「主流」、「代表」、「主役」、「本場」、「主産地」、「標準」、「定説」、「ほとんど」、「大半」、「最盛期」、「旬」など）

【参加者は女性がほとんどである】

女性が参加者のほとんどである（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Женщины составляют большинство участников.

「XのZがYである」の形（「参加者のほとんどが女性であること」）

⇒Большинство участников составляют женщины.

「参加者」を取り立てて表現する場合、「ほとんどである」を例えば「(数において) 優勢である」という動詞で表現すると

⇒Среди участников преобладают женщины.

③「原因」類（「原因」、「きっかけ」、「発端」、「動機」など広い意味で原因を表す名詞）

【彼の自殺は失恋が原因である】

失恋が彼の自殺の原因である（こと）（無題化した命題レベル）

¹⁶ 野田、前掲書、46-47頁。

⇒ Несчастливая любовь является причиной его самоубийства.

「XのZがYである」の形（「彼の自殺の原因が失恋であること」）

⇒ Причиной его самоубийства является несчастная любовь.

「彼の自殺」を取り立てて表現する場合、「原因である」を例えば「引き起こされる」と表現すると

⇒ **Его самоубийство** вызвано несчастной любовью.

④「目的」類（「目的」「ねらい」「目標」など）

【この実験は乗り物酔いの原因説明が目的である】

乗り物酔いの原因説明がこの実験の目的である（こと）（無題化した命題レベル）

⇒ Выяснение причины укачивания является целью этого эксперимента.

「XのZがYである」の形（「この実験の目的が乗り物酔いの原因説明であること」）

⇒ Целью этого эксперимента является выяснение причины укачивания.

「この実験」を取り立てて表現する場合、「目的である」を「目的とする」という動詞表現を用いると

⇒ **Этот эксперимент** имеет своей целью выяснение причины укачивания.

⑤「基盤」類（「基盤」「前提」「条件」「根拠」「決め手」「財産」など物事の成立にとって重要な側面を表す名詞）

【民主主義は個人が基盤である】

人権が民主主義の基盤である（こと）（無題化した命題レベル）

⇒ Права человека являются основой демократии.

「XのZがYである」の形（「民主主義の基盤が人権であること」）

⇒ Основой демократии являются права человека.

「民主主義」を取り立てて表現する場合、「基盤である」を「基盤とする」という動詞で表すと

⇒ **Демократия** основывается на правах человека.

⑥「限度」類（「限度」「上限」「最初」「最後」「初日」「潮時」など物事のおよぶ範囲の限界を表す名詞）

【重量は 20 キロが上限である】

20 キロが重量の上限である（こと）（無題化した命題レベル）

⇒ 20 килограмм — предел веса.

「XのZがYであること」（「重量の上限が20キロであること」）

⇒ Предел веса — 20 килограмм.

「重量」を取り立てて表現する場合、例えば「上限である」を「超えてはならない」と考えると、

⇒ **Вес** не должен превышать 20 килограмм.

本項の構文タイプ（「XはYがZである」が基本）をロシア語訳する際には、上で見たように、多くの場合「XのZがYである」を基にして訳すことが可能である（結果として「象は鼻が長い」と同じ構文になる）。特に「X」を主題化して、その部分をロシア語訳で「テーマ」として文頭に出す場合は、たいてい「Zである」の部分を動詞表現ないし形容詞表現にしなければならず、これはその語彙項目によって大きく表現が異なり、場合によっては困難であることも多い。

6. 被修飾名詞が主題になっている文：「辞書は新しいのがいい」 構文

これは「XはYがいい」（ほかに「XはYを使う」など）で代表される構文だが、この場合のXとYは基本的には「類」と「種」の関係にあり¹⁷、Yは、

¹⁷ 本稿4の②で「部分を表す語」を扱ったが、そこでの「全体と部分」の関係と、ここの

野田によると次の3つのタイプがある：

- ①「辞書は新しいのがいい」タイプ（形容詞や動詞に「の」「もの」など名詞の代用形式がついたもの）；
- ②「辞書は白水社がいい」タイプ（「YのX」という格関係）；
- ③「辞書は『新英和辞典』がいい」（「YというX」という格関係）¹⁸。

①②「辞書は新しいのがいい」・「辞書は白水社がいい」タイプ

これは「新しい辞書がいい」「白水社の辞書がいい」と無題化されるものである。これらをXを主題化した形でロシア語に訳するのは難しいが、いくつか例文を挙げて翻訳可能性を考えてみよう。Xを主題化するとき、一つは前置詞 из を用い「Xの中から」とできる場合がある。

【辞書は新しいのを薦める】

新しい辞書を薦める（こと）（無題化した命題レベル）

⇒Я рекомендую новый словарь.

「辞書」を取り立てて表現する場合

⇒Из словарей рекомендую новый.

しかし、次のように「蚊—メス」のように、YがXの「種類」ではない場

「X」と「Y」に見られる「総称と部分」の関係については一般に誤解が多いので、ここで整理しておきたい。これには「換喩」と「提喩」の違いを説く佐藤信夫の説明が役に立つ。グループμの説明を引用しながら佐藤は、《全体》をいくつもの《部分》に分解して理解する様式には異なる二つのやり方（Π様式とΣ様式）があると言う。例えば、「木」という《全体》を考えた場合、[(Π) 木=枝および葉および幹および根……]と[(Σ) 木=ポプラまたは柏または柳または樺……]の関係が考えられる。つまり、Π様式とはまさに現実的な一本の樹木全体を現実的に分解して理解する操作であり、Σ様式とは、要素が木という集合に対してちょうど種が類に対してもつ関係をもっているものである（佐藤信夫『レトリック感覚』講談社、1992年、181-189頁参照）。本稿4で扱った「部分を表す語」はΠ様式でとらえた「部分」であり、ここで扱うYはΣ様式でとらえた「部分」である。

¹⁸ 野田、前掲書、第6章。

合、из が使いにくい。

【蚊はメスが刺す】

メスの蚊が刺す (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Самки комаров кусаются.

「蚊」を取り立てて表現する場合

⇒ **У комаров** кусаются самки.

ほかに語順によって主題化できる場合もある。次は、Xのみを主題として文頭に出した例である。

【パイナップルは缶詰しか食べたことがない】

缶詰のパイナップルしか食べたことがない (こと) (無題化した命題レベル)

⇒ Я ел только ананасы в консервах.

「パイナップル」を取り立てて表現する場合

⇒ **Ананасы** я ел только в консервах.

③「辞書は「新英和辞典」がいい」タイプ

「魚はサケがいい」や「外国語は英語とロシア語をやりました」、「野菜はキャベツとキュウリがあります」などのように、Xが「総称」、Yがその中の「個別の種」である場合、格関係としては「XというY」が想定されるが、たとえば「英語という外国語」という表現が多くの場合ほとんど無意味であるように、この無題化表現は (Yが特殊な種類である場合を除いて) 現実的にはほとんど使われることがない形である。Xを主題化する場合には、ロシア語では「Xの中で」(из X) という形で表されることが多い。

【魚はサケがいい】

(サケという魚がいいこと) (無題化した命題レベル)

(⇒Я люблю кету из рыб.)

「魚」を取り立てて表現する場合

⇒**Из рыб** люблю кету.

【外国語は英語とロシア語をやりました】

(英語とロシア語という外国語をやったこと) (無題化した命題レベル)

(⇒Я изучал русский и английский языки из иностранных языков.)

「外国語」を取り立てて表現する場合

⇒**Из иностранных языков** я изучал русский и английский языки.

【野菜はキャベツとキュウリがあります】

(キャベツとキュウリという野菜があること) (無題化した命題レベル)

(⇒Есть капуста и огурцы из овощей.)

「野菜」を取り立てて表現する場合

⇒**Из овощей** есть капуста и огурцы.

7. 節が主題になっている文：「花が咲くのは7月ごろだ」構文

「花が咲くのは7月ごろだ」構文は、「7月ごろ花が咲くこと」のような格関係から、「花が咲く」という節が主題になったものである。野田によれば、この構文の焦点（「7月ごろ」の部分）に入りやすいのは、「理由」（「彼が仕事をやめたのは、仕事への興味を失ったからだ」）や「時」（「花が咲くのは7月ごろだ」）、「が」格成分（「万有引力の法則を発見したのはニュートンだ」）のほか、「を」格成分（「私が食べているのはボルシチだ」）、「に」格成分（「私が驚いたのはその商品の安さにだ」）、「で」格成分（「私が彼に最後に会ったのはモスクワでだった」）などである¹⁹。

¹⁹ 野田、前掲書、第7章。ただし、例文はほとんどが本稿の筆者のものである。

このタイプの構文のロシア語訳はあまり問題とはならない。ロシア語文の主題はもっぱら語順で表わされるため、これらの主題節を文頭のほうに置くことで表わされる場合がほとんどである。いくつか例を挙げておこう。

[理由が焦点]

【彼が仕事をやめたのは、仕事への興味を失ったからだ】

⇒Он бросил работу, потому что он потерял интерес к ней.

[時が焦点]

【花が咲くのは7月ごろだ】

⇒Цветы расцветают примерно в июле.

[が格成分が焦点]

【万有引力の法則を発見したのはニュートンだ】

⇒Закон всемирного тяготения открыл Ньютон.

[を格成分が焦点]

【私が食べているのはボルシチだ】

⇒Я ем борщ.

[に格成分が焦点]

【私が驚いたのはその商品の安さにだ】

⇒Я удивился дешевизне этого товара. / Я удивился (тому), что этот товар дёшево.

[で格成分が焦点]

【私が彼に最後に会ったのはモスクワでだった】

⇒Я в последний раз увидел его в Москве.

これらのうち特に「を格成分」、「に格成分」、「で格成分」において顕著だが、ロシア語訳では日本語文と比べて必ずしもこれらの要素に大きな焦点が当たっている感じがしない。例えば、Я ем борщ という文は「私が何をしているかと言えば、ボルシチを食べている」という文（つまり「私」のみが主題化されている）と区別がつかないという問題がある。このような場合、特に節全体を主題化する必要があれば、例えば То, что я ем — это борщ などとすることが可能である。しかし多くの場合、ロシア語訳は Я ем борщ のタイプの訳文で十分であろう。

8. 破格の主題をもつ文：「このにおいてはガスが漏れてるよ」構文

これは、これまで見てきたような格関係にもどせない例であり、一般には「誤用」とされることが多いものも含まれるが、現実によく使われるタイプである。野田はこのタイプの構文を構造の観点から①過剰型、②不足型、③漠然型の3つに分類している²⁰。それに基づいて、それぞれの構文の構造や機能を考えながらロシア語訳を検討しよう。

①過剰型

【五百円硬貨の両替は、左側5番の機械で両替してください】

こういう過剰型は、「言いたいことを強調したり、文を理解しやすくしたりする効果をもつことがある」²¹ものの、ロシア語訳の際には、「五百円硬貨の両替は、左側5番の機械でしてください」あるいは「五百円硬貨は、左側5番の

²⁰ 野田尚史、前掲書、第8章を参照。なお、菊地康人は本項のような破格型を〈特定類型〉と呼び、それを意味内容にしたがって〈内容説明型〉、〈方法説明型〉、〈結果・展開型〉、〈背景解析型〉などに分けている（菊地康人「〈内容説明型〉〈方法説明型〉の「は」構文」／築島裕博古稀記念会（編）『築島裕博古稀記念 国語学論集』汲古書院、1156-1131（(52)-(82)）頁を参照）。しかしこれは網羅的な分類ではなく、主なものだけに限っているため、本稿では形式に基づく野田の分類にしたがった。

²¹ 野田、前掲書、77頁。

機械で両替してください」をもとに考えるのが適切だろう。これらは例えば次のように訳される。

⇒ **Размен монет в 500 иен** производится в 5-ом слева автомате. /
Монеты в 500 иен можно разменять в 5-ом слева автомате.

②不足型

【このにおいはガスが漏れてるよ】

この不足型は、「～からだ」「～ことだ」などの文末が省略されていると考えられるものが多く、この例文も「このにおいはガスが漏れているせいだ」のように考え、直訳すると例えば次のようになる。

⇒ **Этот запах** идёт из-за утечки газа.

実際の発話状況を考えて、「何かにおいがする。きっとガスが漏れてるよ」のように捉えると、例えば次のようになる。

⇒ **Чем-то пахнет**. Наверное, есть утечка газа.

【詳しいことは、記事をご覧ください】

このパターンも多くみられる。ロシア語でもこの場合はやや言葉足らずの次のような表現が可能である。

⇒ **Более подробно** посмотрите статью.

「詳しいことに関しては、記事をご覧ください」であれば、次のようになる。

⇒ **По поводу подробностей** посмотрите статью.

さらに「詳しいことについて知りたければ、記事をご覧ください」と考えれば、次のようになる。

⇒ **Если вы хотите узнать о подробностях**, посмотрите статью.

【お買い物はNデパートへどうぞ】

「お買物をしにNデパートへどうぞ」

⇒**За покупками** пожалуйста в универмаг N.²²

【私はコーヒーだ】

いわゆる「うなぎ文」であり、省略されているものが文脈や場面から明らかな時に使われることが多い。「うなぎ文」に関してはいろいろな立場から様々な解釈があるが、ここでは「省略」と見なして、破格の「不足型」に分類する。ロシア語でも場合によっては動詞を省略して«я - кофе»と言うことも可能だが、文脈に応じて省略されている動詞を補ったり、あるいはレストランでウェイターに向かって言うときであれば「私にコーヒーを持ってきてください」という形も可能である。

⇒Я возьму кофе. / Я буду (пить) кофе. / Я выпью кофе. / Я предпочитаю кофе. / Мне кофе. など

③漠然型

【作り方は、材料を弱火で1時間ほど煮込みます】

このように、文全体の内容を示す漠然とした主題を立てる「漠然型」は、ロシア語では例えば「作り方は次のようである」と言い切ってしまうのがよい。

⇒**Рецепт следующий:** варить продукты на слабом огне около часа.

9. タイプ間の変換

これまで、厳密に日本語の構文の形に基づいて分類してきたが、実際の日本語の例文がどのタイプに分類されるかそれほど明確ではない場合もあり、また実際の「和文露訳」のプロセスを考えた場合、適宜日本語を同じ意味の別の構文に変えながら、適当なロシア語を当てはめることが多いということを考える

²² Б.П. Лаврентьев, Практическая грамматика японского языка. М.: «Живой язык», 1998, с. 270 の例文。

と、個々のタイプの間で自由に変換しながら、対応するロシア語を考えた方がよい場合もある。

【参加者は女性が多い】

日本語の格関係を考えた場合、まず「日本は魚が多い」(←「日本に魚が多い(こと)')と同じタイプと考え、「参加者に女性が多い(こと)」と無題化されると考えることができるだろう。あるいは、「女性」を「女性の参加者」の略ととらえ、「辞書は新しいのがいい」と同じタイプと捉えることも可能であろう。またさらに日本語の意味をほとんど変えずに、次のように変形してみよう。「参加者はほとんどが女性である」とすれば、これは「象は鼻が長い」タイプであり、あるいは「参加者は女性がほとんどである」とすれば、これは「かき料理は広島が本場だ」と同じタイプとなる。

⇒ Среди участников «много (больше) женщин. / Большинство участников составляют женщины. / Среди участников преобладают женщины.

【この道は歩きにくい】

上でもすでに触れたが、これは「この道を歩きにくいこと」と無題化できるほか、「歩きにくい」を一つの形容詞のようなものと捉えて「この道が歩きにくいこと」のようにも無題化できる。また、少し日本語の語を入れ替えて、「この道は歩行が難しい」と考えれば、これは上で扱った「象は鼻が長い」タイプである。

⇒ По этой дороге трудно «идти (ходить). / Эта дорога трудна для хождения.

ほかにも日本語内で大きく意味を変えずに言い換えることによって翻訳の可能性が広まることがある。さまざまな言い換えを通してロシア語訳を柔軟に考えていくことも必要である。

さいごに

これまで「は」構文に関して主に日本語の分類に従ってロシア語訳の可能性を論じてきたが、論じ残している問題は多い。すでに述べたように、そもそも主格を表す「が」にしても個々の語彙項目によってロシア語訳は大きく変わり得るものであり、和文露訳の問題はけっして構文レベルで完全に一般化できるようなものではない。また、ロシア語の「主題」は文頭に出すことで表わされるとの前提で論を進めてきたが、主題の要素が複数ある場合の語順の問題には踏み込まなかった。また、主題が文頭に来るといのはそもそもニュートラルな書き言葉に限った場合であり、感情的な発話や話し言葉の場合に関しては、イントネーションの問題も含めて別途論を立てる必要がある。それに関連して、本稿ではコンテキストを除外した単文のみを扱ったが、談話レベル、テキストレベルで考えた場合に「主題」がどういう振る舞いをし、それが日本語とロシア語でどう異なるのかという問題、またそれ以前に、ロシア語の「テーマ」と日本語の「主題」がそもそも一致するか否かという問題もある。構文タイプの個々の点に関しても、例えば「象は鼻が長い」(「XはYがZだ」)構文における無題化「XのYがZである(こと)」の容認度とそのロシア語訳での容認度の問題(例えば日本語では「彼女の髪が美しい」は可能でも、「彼女の足が痛い」の容認度が著しく下がる)など、まだまだ論じるべき問題は多い。しかし少なくとも、「は」を伴う個々の日本語文のロシア語訳の際にどのように考えればよいのかという指針と見通しはある程度与えられたのではないかとと思われる。本稿をひとつの手がかりにして、さらに研究が深まることを期待したい。

なお、本稿のロシア語訳は文脈を考慮に入れず、基本的に日本語の構文に可能な限り忠実に考えたものであり、文脈に応じて別の訳のほうがよい場合もある。

また、「題目の提示『Xハ』は、だいたい『Xニツイテ言エバ』の心持ち」²³

ということを考えて、主題を表す「は」構文はロシア語では多くの場合、*«что касается ..., то ...»* という構文で表すことも可能であり、それが適切である場合も多い²⁴。しかし、このロシア語の構文は文字通り「～について触れるならば」という意味であり、日本語の「～は」よりもその意味がつねに強く出ることから、使われ得る範囲は「～は」よりも圧倒的に狭い。その濫用を防ぐために、本稿のロシア語訳例では、あえてこの構文を用いなかったことを最後に断わっておく。

引用文献

- 青木則子「ロシア語のテーマ——テーマ・レーマ区分の観点から——」／益岡隆志編『主題の対照』くろしお出版、2004年、149-169頁
- 天野みどり「二つの補充成分間の意味的關係づけ——経験的間接関与構文、特に複主格文を中心として——」／『新潟大学人文科学研究』80、1992年、33-58頁
- 庵功雄『《象は鼻が長い》入門——日本語学の父 三上章』くろしお出版、2003年
- 池上嘉彦『「日本語論」への招待』講談社、2000年
- 磯谷孝『ロシア語作文教程』三省堂、1973年
- 菊地康人「〈内容説明型〉〈方法説明型〉の「は」構文」／築島裕博古稀記念会(編)『築島裕博古稀記念 国語学論集』汲古書院、1156-1131 ((52)-(82))頁
- 佐藤信夫『レトリック感覚』講談社、1992年
- 西山佑司「「象は鼻が長い」構文について」／『慶應義塾大学言語文化研究所紀

²³ 三上章、前掲書、8頁。

²⁴ 例えば、*Лаврентьев*、前掲書では「この野菜は葉を食べます」の訳として*«Что касается этого овощного растения, то в пищу употребляются его листья»*を挙げている(270頁)。

要』21、107-133頁

野田尚史『「は」と「が」』くろしお出版、1996年

野田尚史「主題の対照に必要な視点」／益岡隆志編『主題の対照』くろしお出版、2004年、193-213頁

益岡隆志編『主題の対照』くろしお出版、2004年

三上章『象は鼻が長い——日本文法入門』くろしお出版、1960年

Большой энциклопедический словарь: Языкознание. Глав. редактор, В.Н. Ярцева. М.: «Большая Российская энциклопедия», 1998

Лаврентьев, Б.П. Практическая грамматика японского языка. М.: «Живой язык», 1998.